

大地

第 45 号
2014. 1. 30. 発行
浄 國 寺
上越市朝3丁目14-10
☎025-523-5724

〔俳句〕

山崎 睦

見晴らしは霞む岬と米山と
又今年城址の花に遇ひしこと
一転機憂きことさらに更衣
新樹光意外に小さき虚子の墓
登り来て一気に飲みし山清水
名水も瀬音となりて谷若葉
鯖になりても残る海の色
暑き日は暑き顔にて処しゆかん
山茶花の花の盛りを囲いけり

(平成十二年作)

闇夜と朝の光

山崎隆昌

本年は午歳(うまどし)。その始まりにふさわしく初日を観ることができました。重なる東の雲の切れ目から、輝く太陽が顔をのぞかせるとまぶしい光が四方に走り、その瞬間藍色の風景が明るく赤に変わりました。

初日の出番は少しの時間、間もなく雲に隠れましたが、それでも厳肅な気持ちになり何かしら満ち足りたものを感じたのです。

人は、今も昔も変わらず太陽に特別な畏敬の念を抱いており、太陽は漆黒の夜の闇を破り、無辺の大地に光を照らす圧倒的な存在です。人々の活動は日の出と共に始まり、日没と共に終わる。暗い夜は大切な安息の時間。ところで近年、生活環境の変化により私達の昼や夜の感じ方が随分変わって来ました。特に夜の闇と光について変化を強く感じます。

換言すれば、太陽や、月、星などの自然の光に対する感じ方の変化とも言えるでしょう。

五十年前の高田の寺町は、民家が少なく六十を超える寺院が二列に並び、町内には樹木がうっそうと茂り、夜になれば通りは真っ暗闇で、電柱の電灯がほの暗く照らすのみで、他町内から一犬も通らぬ寺町」と言われたものです。夜道には懐中電灯が必携でした。

各家庭も同じで、夜は裸電球が唯一の光源、テレビなど無く、日が落ちると夕食を食べ、お茶を飲み、後は布団を敷いて寝るのみで、「蛍の光、窓の雪」は少し古すぎるとしてもどの家庭も似たようなものでした。

現在は、家の中も街中でも人工の光が溢れ、少し暗いとすぐにクレームがつき改善される。テレビ、パソコン、ゲーム、二十四時間のコンビニ等、夜を楽しむことに不自由しません。けれども、昼と夜の違いが分かりにくくなった現代の生活状況には時に違和感を覚えます。暗い闇で不自由な、反面静かで、ゆっくりと時間が流れる眠りの夜があるから、朝の光がありがたく「新たな一日が始まる」という気持ち膨らむと思ふのです。苦しみが大いいほど喜びが大きいように、人々は夜の闇を深く感じる時、昼の明るさを心に感じる事ができる。朝の光はその象徴と言えます。

次に掲げるのは、谷川俊太郎の詩の一節

朝はその日も光だった
おそろしいほど鮮やかに
魂のすみずみまで照らし出され
私はもう自分に嘘がつけなかった
私は「おはよう」と言い
その言葉が私を守ってくれるのを感じた

静かな夜の闇から、輝く朝の光を迎えたい

携帯電話

柴田法子

日常生活に携帯電話があることが普通になった。それほど昔のことではないのに、携帯を持つ前の生活は記憶のはるか彼方に霞んでいく。

先の震災の時、八十になる母は「ちょっと買い物に行ってくる」と出かけている最中だった。上野方面というだけで、どこにいるのかはつきり判らない。幸い一度だけ携帯が通じて、電車で十五分程はなれたところで無事であることが確認出来た。電車が止まり道路も大変な渋滞で、結局家に帰りついたのは七時間近くたってからだったけれど、とにかく無事であることがわかっていただけで、私たちはどれだけ安心したことだろう。この日、多くの人たちも携帯電話の恩恵を感じたことだろう。

長男が小学校三・四年の頃だったと思う。なんの用事だったか、一人で近所に自転車で出かけた。十五分ほどで戻ると言っていたのに、なかなか帰ってこない。慎重な長男が一人で予定外の行動を取ることはめったに無い。一時間ちかくたって、さすがに心配になり探しに出た。あたりを見回しながら小走りで行くと、道路わきに長男の自転車が立てかけて

あるのが見えた。側に寄ってみると、壊れている様子はない。長男の性格から考えにくいことではあるけれど、もし友達と出合っただけのまま遊びに行っただけなら、なぜ自転車を置いていったのか解せない。一気に悪い想像が押し寄せた。矢も盾もたまず、近くの家のインターフォンを鳴らし、わけを話して何か見ていなかったか聞いて回った。

結局何も判らないまま家に戻って、もう少し探すか、それともさっさと警察に電話をしたほうがいいのか。家から出たり入ったりしながらおろおろしているところに、主人が長男を連れて帰ってきた。聞けば、長男と前後して車で用足しに出かけた主人が長男と行き合っただけで一緒に行くかということになり、そのまま連れて出かけたらしい。外の駐車場で、ご近所もはばかりず、大きな声を出したと思う。なぜ、一度戻ってから行かないのか、公衆電話から連絡することだって出来ただろう、こちらがどれだけ心配するかわからないのか云々。随分と怖い顔をしていたらしい。主人がひたすら「ごめん」と謝るよこで長男はポカンと私達を見ていた。あの時、今ぐらいい携帯電話が普及していたら、主人はまず連絡をしてきただろうし、私は外で大声をあげることもなかっただろう。

昔は門限の厳しい家が多かった。うちはそれほどでもなかったけれど、それでも何度か

雷を落とされた。玄関を開けたら、母が鬼の形相で仁王立ちしていたこともあった。その頃はうちの親はうるさすぎると思ったけれど、今なら良くわかる。親は帰りが遅いから心配なのではなく、子供が無事かどうかかわからないから心配なのだ。多少のお小言は言っても、子供の無事が確認できれば基本的にオーケーだ。携帯電話が普及して、帰りが遅くなっても無事かどうかは確認出来るように成った。帰りが遅いというだけで鬼の形相になる親は少ないだろう。心配のあまり鬼になる親の姿を、今の子供たちはほとんど見る機会が無い。

誰かを心配したり気遣ったりしていた時間は、どこにいったのだろう。そのために費やしていた時間と気持ち、私は今何に使っているんだらう。ひたすら誰かに思いを馳せて祈ったり願ったりした時間が、私と誰かにもたらしてくれたものは何だったんだらう。

見境がなくなるほど心配することはなくなり、そして、誰かに心配されていることも忘れがちになる。安心や便利を手にした替わりに手放してしまったものが、たぶんあるのだ。

柴田さんは、二回目の寄稿です。

前回は「そこにあること」の文、多くの人から読後感が寄せられました。

またまた内容の濃い、かつ軽妙な文章で、何か優れた短編小説を読んでいるようです。

折りにふれて

北城町 蟹江 秀夫

ここからは降りて一人で歩きます
金木犀の咲きつづく道

思ひ出の佳き日になればと赤倉に
孫を囲みし高原の夜

吹き荒れて吹雪ようやくおさまりて
かがやき出でし月の冷たさ

しんしんと雪降る夜はさびしくて
早目にねよと言ひし母ありき

又来ると幾度もあとをふり返り
別れし教え子遠くに病めり

朝おきてそれだけ書いて鉛筆を
なめなめ私を見ていた教え子

千年の命を秘めて大賀蓮
葉波は堀をうずめつくせり

この道を曲がれば母に会えそうな
気がしてふっと立ち止りたり

酒祭まっていたのんべー集い来て
町は一気にふくれ上がり

村境六百年の大櫓
芽吹き輝く春は来にけり

雪舞

西城町 田中 光

蟹江さんは百一歳、長い教員生活の後、
趣味を活かした悠々自適の生活に入られる
今は九十歳で始められた短歌に傾注、朝日
新聞の新潟県版の短歌欄の常連です。
百歳を超えて益々意気軒昂。

平成十二年二月十三日、夫は肺癌による悪
化で入院、わずか十九日でこの世を去りまし
た。あまりにも突然の事で、私は冷静さを失
い全身にふるえが来てしまいました。

夫の死は、私にとって最大の不幸で、頭が
まっ白になり何物も見えなくなりました。夜
はねむれず、食欲もなく厳しい日々でした。
仏壇の前に座して、涙をふきふき「お迎えに
来て下さい」と祈っていました。

そんなある日思いついた事は、どうしたら
夫の供養ができるかと言うことでした。そう
そうつたない句でもまとめて句集でも
と考えました。

夫が浄土に召された日は、朝から粉雪がち
らちら舞いおりていましたので、題名を「雪
舞」としました。その中から十三句選んでみ
ました。

凜とした寒い朝の白銀の世界に旅だった夫
早く逝ってしまった夫の魂が安らかにと祈り
ながら

病床に顔あげて見る 流れ星

後あとの 妻子思うか 雪舞いて

告知せぬ 最後のひみつ 寒つばき

雪舞いて 六十八才の旅路 あわれとぞ

寒たえて 泣ごと言わず 壮絶に

凜りんと 白梅さきて 君のなく

ああ無情 孤独にたえる 冬木立

梅さきて 主人逝きしと 鯉につぐ

桜咲き 鯉の世話して 泣きにけり

つげ芽ぶき 夫なき庭いとさびし

穏やかで 少し寂しき 老の春

庭ごけに 水かけして 君おもう

子の顔に 夫のおもかげ 蟬しぐれ

田中さんのご主人は、平成十二年の二月
六十八歳で逝去されました。

光さんは、畑仕事、菊の盆栽、書道など
多才ぶりを存分に発揮されています。

ワン公物語⑥

華のつばやき

山崎華(慎子代筆)



私は華(はな)。六才の雌のパグ犬。私は七才離れた蓮姉ちゃんがついて、このつばやきも蓮姉ちゃんがしていた。内心、私だつてつばやきたいなアと思っていたら、思いも寄らないこんな形で、順番が廻って来てしまったのだ。

暑かった去年の夏のある日、さよならも言わないで蓮姉ちゃんは居なくなってしまった。苦しんでいることも、死んじゃったことも、本当は分かっていたのだけど、蓮姉ちゃんにまだまだ側に居て貰いたかった私は、死んでしまったことを分かりたくなかった。そう、ムズかしく言えば認めたくなかったのだ。

父さんと母さんが黙って私を抱きしめ、なでくれる時間が増えたようだった。悶々としていたある日、母さんがダックスフントの形のぬいぐるみをハウスの中に入れた。いつも蓮姉ちゃんのおなかやお尻に頭を預けて呑気に寝ていた私に、せめてもの慰めになればと思つたらしい。

でも、こんなの蓮姉ちゃんの代りになるもんか！私はそいつを啜えて放り出した。母さんがまたハウスの中に入れておく。放り出す。

「あら可哀想に、また捨てられちゃったのーなんて言いながら、諦めずにまた私の側に置いて行く。そんなことを繰り返して私も少し考え直す。実際まアるくなつて眠る時、ちよつとアゴを乗せるのには、なかなか快適なのだ。蓮姉ちゃんの足下にも及ばないのは、初めから分かっていたけれど、試してみたら捨てたものでもない。トクントクン胸の音もしないし、何とも言えない心地よい温もりにも欠けるけど。まア イゝか。

うっかり眠りこけた私を見て、父さんと母さんが「ねえ、ちゃんとアゴをのせて眠ってるよ。良かったね」なんて言って笑ってる。

そんなに簡単にコイツを受け入れては蓮姉ちゃんに申し訳が立たないやと思ひ、またハウスの外に放り出す。「あら、まだ気に入らないの」なんて言いながら、又々ハウスの中に入れてくれる。普段はコイツと付き合ってるけど、一日中遊んで貰えないような日は、コイツに八つ当たりして、口に啜えてブンブン振り回してやつたりする。

蓮姉ちゃん、何で私を残して死んじゃったのと思うけど、もともと丈夫じゃなかったしね。私は蓮姉ちゃんと姉妹になった時から、蓮姉ちゃんが大好きだった。私は安心して甘え、相当わがまゝな妹だった。

私達は時としてケイコさん家に預けられることがあった。ケイコさん家には「姫」とい

う名の白い柴犬がいて、名前の通りお姫さまみたいに振る舞う犬なのだ。ケイコさんは婆やで、その夫は爺やなのだ。ケイコさんはココロと笑う。

ケイコさんは私達を預かる為に、新築の家の部屋をフェンスで仕切って、姫と私達を隔離する算段までしてくれた。フェンスの所に、姫が近付いて来る。好奇心の強い私は「ナニナニ？」と近寄ろうとする。すると蓮姉ちゃんが私の前に立ちはだかつてウーウー言いながら姫を威嚇するのだ。「この子は私の大事な妹よ、手出しは許さないから！」気位の高い姫は「あんた達に興味なんて無いわ。所詮居候じゃないの」といった風情で、あっさり立ち去って行く。

そんなふうにして蓮姉ちゃんは私を守ってくれていた。蓮姉ちゃんが居なくなつて、たとえようもなく寂しい。会いたいなアと思う。でも、蓮姉ちゃんがいつも言っていた。私達ワン公は、多くの人間達と違って状況を受け入れるのが上手なんだよ。いつまでもひきずらないんだよ。まアイゝかの精神だよ。

そうか、まアイゝか。

(以下次号)